

主役

に聞く

2009くまもと

2009.12.18 (金)
(H21)

◆3◇

—天草地方の伝統的な染め物「天草更紗」が今年、天草市職員夏のクールビズのシャツとして採用されました。

「天草更紗は江戸時代から明治、大正、昭和にかけて、復興されては途絶える歴史を繰り返してきました。平成に入り、その魅力が一般の人に伝わったのは大変うれしい。伝統は日常生活の中で使ってもらうことで受け継がれる。意味のある1年でした」

—更紗の復興に取り組んだきっかけは。

「天草更紗との出会いは約20年前、結婚を機に移り住んだ天草の民芸品店でした。糸を紡いで草木染にし、生地にする染織の作業をしていたため、約15年前、郷土史家の方々から「復興してほしい」と、資料や写真をいただきました。

「天草更紗」復興に力注ぐ染織家

中村いすずさん (52)

当時は踏み切りがつかなかったのですが、資料を部屋に眠らせたままでもいいのかという思いが常にあった。6年前、地元の文化協会から話を持ち掛けられたのを機に、この仕

古来の世界観伝えたい

伝統継承

事を本格的に始めました」

「いただいた資料の中にあ

った天草更紗には、異国情緒豊かな模様、海草やウミガメ、草花が多く描かれています。南蛮貿易で伝わったさまざまな宝物を、何とか後世に伝えたいと思っています」

—製法で注意していることは。

「天草更紗は、まず和紙に

の衣類をはじめ、スカーフや



「古来の宝物といわれるような天草更紗を作りたい」と話す中村いすずさん

図案を描いて型紙を作り、模様をカッターで彫り込みます。その後、型紙を生地に当て、上から染料を塗り込みます。このとき、色のバランス

も重要です。型紙と生地が少しずれると更紗の模様にならないので、最も神経を使います」

—どんな作品を制作していますか。

「シャツやワンピースなどは、まず和紙にの衣類をはじめ、スカーフや

ネクタイ、帽子、ポーチなどもあります。大きな反物や帯になると、完成まで約1カ月かかるものもありますね。

「シャツには天草・島原の乱の一揆軍が、籠城先の原治

天草更紗 室町時代にインドやスマトラ、ジャワなどから、西欧人の南蛮船で長崎に運び込まれ、天草に伝わったとされる模様染めされた布。鍋島更紗や江戸更紗など「和更紗」の一つ。図柄は花鳥風月が中心で、異国情緒豊かな色合いと、

渋味のある模様が特徴。天草の住人は江戸時代に技術を習得し、当時は庶民の着物や風呂敷などとして広く流行したといわれている。明治期に入ると継承者が減り、大正、昭和にかけて、数人が復興に取り組んだという。

「同じ図柄を繰り返す更紗の神秘的な模様は、無限に再生する生命の営みをも感じさせます。そんな古来からの秘められた世界観を伝えるとともに、天草の子どもが胸を張って『古来の宝物』と言える作品を作りたいです」

—聞き手は天草支局・河野賢